

ブルーベリーを知ろう！

ブルーベリーはツツジ科スノキ属に分類されるアメリカ原産の落葉低木果樹です。日本で生産される品種には、冷涼地向きで酸性土壌を好み、収穫が初夏になるハイブッシュブルーベリーと、関東から九州まで栽培でき、収穫が夏から初秋になるラビットアイブルーベリーがあります。ハイブッシュ種とラビットアイ種を組み合わせると6月中旬から9月下旬までの長い期間収穫ができます。

ブルーベリーは、寒さに強く乾燥に弱い特徴があります。また、農薬を使わずに栽培するため、収穫してそのまま食べられることも特徴です。植物としては、春の芽吹き、白い可憐な花、新緑の美しさ、青い果実、秋の紅葉と落葉など四季の変化を堪能できることで、鑑賞価値が高く、庭木や垣根として植えている人も多くいます。



ブルーベリーの代表的な品種

デューク (Duke)

(ハイブッシュ系の早生品種)

樹姿は直立性で樹勢は旺盛。果実生産力は安定して高い。成熟期が揃うという特徴がある。果実は中粒から大粒。果粉が多く、果皮は青色。味はしっかりした、食べ応えのある味。

収穫期は6月中旬～7月上旬ごろ



ブルークロープ (Bluecrop)

(ハイブッシュ系の中生品種)

樹姿は直立性で樹勢は中位。果実生産力は安定して高い。果実は中粒から大粒で収量が多い。果皮は明青色。甘さと酸味のバランスが良く、風味も非常に良い。世界の標準品種とされている。

収穫期は7月中旬～7月末ごろ

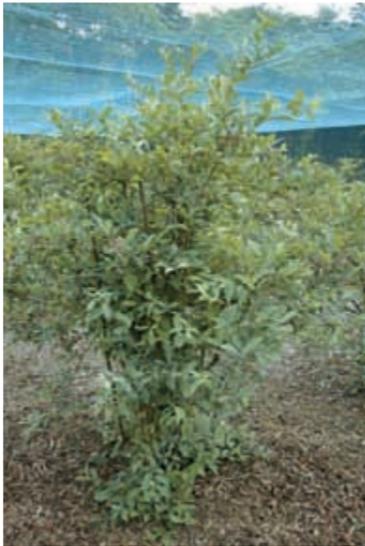


ティフブルー (Tifblue)

(ラビットアイ系の極晩生品種)

樹姿は直立性で樹勢は旺盛。果実生産力は非常に高い。果実は中粒で果粉が多く、果皮は非常に明るい青色。風味が非常に良く日持ち性も良い。世界で最も広く栽培されている。

収穫期は8月下旬～9月下旬ごろ



青い宝石

ブルーベリーってこんな果実

ブ

ルベリーはツツジ科スノキ属に分類されるアメリカ原産の落葉低木果樹です。日本で

ブルーベリー

特集

畑のブルーベリー。

6月、ブルーベリー畑は

鳥から実を守るための

青いネットで覆われます。

それは、わたしたちに

収穫が近いことを教えてくれます。

本物のブルーベリー。

おいしくて安心。

能登町のブルーベリーは高品質です。

完熟のブルーベリー。

摘みたてをその場でパクリ。

何ともいえない甘酸っぱい味はやみつきになること

間違いありません。

輝くブルーベリー。

町のみんなを健康にする。町のみんなを幸せにする。

町のみんなが大好きなブルーベリーを特集します。

ブルーベリーの

粒知識



ブルーベリーについて、みなさんが知りたい素朴な疑問を柳田食産(株)の宮前博人さんに聞いてみました。

Q、ブルーベリーの保存方法は？

A、生の場合は冷蔵庫で保存して2～3日、冷凍する場合は約1年間が賞味期限といわれています。冷凍した場合は、解凍せずに凍った実をそのまま食べた方がおいしいです。

Q、ブルーベリーワイン1本にはどれだけのブルーベリーが使われていますか？

A、720mlのワインに約1kgのブルーベリーが使われています。ブルーベリー1粒が1.5g～2gと考えると約500～650個のブルーベリーがワイン1本になります。また180gのジャム1瓶には200gが使われています。

Q、ジャムを作りたいのですが？

A、ジャムなどに加工する場合は冷凍したブルーベリーを使うと加工しやすいですよ。きのみワイナリーでは、年間を通してジャム作り教室を開催していますので、体験されてみてはいかがでしょうか。

Q、一番おいしい食べ方は？

A、ワインやジャムもおいしいですが、やはり摘みたてを生で食べるブルーベリーは最高です。モデル農場や植物公園横のブルーベリー園では、7月から8月中ごろまで摘み取り体験ができますので、ぜひ生のブルーベリーを味わってみてください。

柳田食産(株) ☎ 76-8100

これまで旧柳田村では、特産品を作ろうと幾度となく目新しい作物の導入普及に取り組んできましたが、なかなか成功しませんでした。

昭和58年、つくば大学からブルーベリーを紹介された故駒寄孝造氏（当時の農協組合長）は、山にブルーベリー畑50aを造成し、自分で栽培を始めてみました。この年、昭和58年は、旧柳田村に特産品として大きく育つことを夢見て、最初にブルーベリーが植えられた記念すべき年となったのです。

本格的な栽培の始まりは、平成元年に水田転作作物として2団地2.2haのブルーベリー園を設けたことです。平成2年には、ブルーベリー生産者24人による「柳田村ブルーベリー研究会（現在のやなぎだブルーベリー生産組合）」が発足。モデル農場でも、栽培技術の取得のために、試験栽培や調査、適合品種の選抜実験などが進められました。しかし、ハイブッシュブルーベリーの団地において年数が増すごとに排水不良による根腐れが原因で樹木が枯死し、管理放棄園ができてきました。またラビットアイブルーベリーの団地では品種特性での不満が発生、栽培意欲を喪失する農家も出てくるなど、長い苦難の道を歩んできました。

平成5年、植物公園を会場に「全国ブルーベリー祭り」を開催、全国各地からブルーベリー関係者が集まりました。この祭りを期にさらなる調査研究を進め、栽培技術が向上した現在では、栽培面積11ha、生産農家90戸、生産量18tにまで拡大しました。



あまざっぱ～い おいしいブルーベリーができるまで

月	ブルーベリーの状態	主な作業
1月	休眠期	剪定
2月		
3月	1年生から4年生の苗木	雪囲い撤去 施肥 春の植付け
4月		
5月	発芽期 展葉期 開花期	防鳥ネット設置 花芽の整理 施肥
6月	果実肥大期	
7月	ハイブッシュ系収穫期	収穫
8月	ラビットアイ系収穫期	摘み取り園開園
9月		完熟したブルーベリーの実
10月	苗木の生産	施肥 防鳥ネット片付け 秋の植付け
11月	休眠期	剪定
12月		紅葉期 落葉期



農家を引っ張っていききたい

たはらよしあき
田原義昭さん (56歳・柳田)

勸能登町ふれあい公社管理課長兼モデル農場長
石川県果樹園芸協会ブルーベリー部会事務局
日本ブルーベリー協会会員

勸能登町ふれあい公社 モデル農場 (字黒川1-205-4) ☎76-10014

柳

田地区でブルーベリーについて一番詳しい人を尋ねると「モデル農場の田原さん」と教えられた。この能登の地にブルーベリーを根付かせたブルーベリーの第一人者、田原さんを訪ねて話を伺った。

取材中も田原さんにはひっきりなしに電話が掛かる。「わたしはが考案した木製チップによる栽培方法がテレビで紹介され、全国から問い合わせが殺到している」とのこと。田原さんがアメリカでのブルーベリー国際会議でヒントを得たチップによる栽培法は平成10年から実験を行

い、平成13年には各農家に広めていった。「昭和58年から水田転換で始めたブルーベリーは、当初はうまくいかなかった。原因を調べると、酸性でやわらかく、水持ちがよい土を好むブルーベリーは、能登の土では育たないことがわかったんです。肥料を使った土壌改良などのさまざまな試みは失敗の連続でした。そのころ能登リサイクル協同組合が誕生し、廃材から大量の木製チップを作っていました。この木製チップを使えばと思いついた実験を始めました」

を証明した田原さんのモットーは「いかに安心でおいしいものを作るか」であり、ブルーベリー畑の横のハウスでは有機栽培のプチトマトも栽培している。今後のことを尋ねると「過疎化、高齢化が進む能登において、これからは第1次産業が非常に重要になります。いろいろな作物を組み合わせて、農家の収入を安定させることができるように農家を引っ張っていききたい」と語る。「ブルーベリーは日本で唯一栽培面積が増えている果樹なんです。初期投資は必要ですが、最初に苦労すれば、後の維持管理はそんなに大変ではあ

りません。高齢者が自分で作って、収穫し、食べて、そして健康になる。そんなふうになってほしいですね」
現在、モデル農場には60品種1000本のブルーベリーが植えられている。品種の説明をしながら「ブルーベリーは同じ品種でも栽培する場所によって地域特性が出るのでおもしろいですよ」と話す田原さんに最後の質問をした。田原さんにとってブルーベリーとは何ですか。「俺の生きがいかな」
照れくさそうに答える田原さんの笑顔は、完全のブルーベリーのように輝いてみえた。

ブ

ブルーベリー生産者の声が届きたくて、「やなぎだブルーベリー生産組合」の組合長である酒井さんの自宅を訪ねた。

酒井さんとブルーベリーとの出会いは平成元年にさかのぼる。五十里地区の18人と童ヶ谷生産組合を作り、1.5畝の栽培を始めた。「最初は良いか悪いかもわからず、収穫も夢見ているはなかった」と当時を振り返る。早生や中生、晩生などの品種もわからない状態での栽培は、大変だったようだ。失敗を繰り返しながらもモデル農場田原さんの指導を受け、収穫も安定していった。「どんな作物も指導者がいないと成功しない。その点、ブルーベリーには田原さんがいる。これから始める人は、田原さんのおかげで失敗することも少ないだろう」と話す。

ブルーベリーの栽培で大変なことや気をつけていることはなんでしょうか。「収穫の時期は毎日5時間ほど摘み取り、そしてそれを大ききで分ける作業が大変」と話すのは、主に摘み取りを担当している妻のよし子さん。それでもやはり「毎年実がなるのを楽しみにしている」と

話してくれた。

合併を機に生産組合の組合員も増えている。「能都地区や内浦地区でもブルーベリーを栽培する人が増えていて、現在組合員数は約90人になった。やりたいたいという人はまだまだいる」と期待を寄せる。収穫時期になると組合員が収穫したブルーベリーは酒井さんの倉庫に集められ、主に柳田食産㈱に出荷される。「他の果樹に比べて販売ルートに困らない」ことが特徴だ。

この柳田食産㈱で造られるブルーベリーワインやジャムも酒井さんの自慢となっている。全国で開催されるシンポジウムで試食してもらっても「柳田のワインやジャムは必ずうまいと言ってもらえる」という。

今後については「生産者として、ブルーベリーが能登町の特産品に育ってほしいと願っている。そのために自分ができることを一生懸命するだけ」と笑顔で話す酒井さんにも最後に同じ質問をした。酒井さんにとってブルーベリーとは何ですか。「年取ってからでもできる、最高の副業ですよ」

まだ緑色の実をわが子のよう

最高の副業ですよ

さかいいちい
酒井一以さん (75歳・五十里)

やなぎだブルーベリー生産組合長
石川県果樹園芸協会副会長





ブルーベリーは
本当に目に良いのか？
視力が低下してきたという
2人の協力で、
実験を行った。

〈実験方法〉
今年のブルーベリーの収穫は、例年より10日ほど遅れているとのことなので生の果実での実験はあきらめ、ブルーベリージャムを摂取してもらった。成分の吸収に関しては生よりも加熱処理したものの方が良いといわれている。
実験は、3日間にわたりブルーベリージャムを摂取して朝と夕方に視力検査を行った。1日目に限り、効果の速効性を調べるために2時間ごとに視力を測った。
また、実験でブルーベリーを摂取した2日後に視力を測定し、効果の消失具合を測定した。

目に良いのか！

最近メガネを購入したY君と毎日パソコンワークのOさんで実験

<p>9:00 朝の視力測定 Y君 右:0.6 左:0.9 Oさん 右:0.4 左:0.3</p> <p>18:00 夕方の視力測定 Y君 右:0.6 左:0.5 Oさん 右:0.5 左:0.6</p> <p>2日後 8:30 最後に摂取してから48時間が経過しての視力測定 Y君 右:0.6 左:0.5 Oさん 右:0.6 左:0.6</p> <p>18:00 夕方の視力測定 Y君 右:0.4 左:0.3 Oさん 右:0.4 左:0.5</p>	<p>18:00 効果が現れるといわれる4時間後の測定 Y君 右:0.3 左:0.5 Oさん 右:0.4 左:0.7</p> <p>2日目 8:30 同じくブルーベリージャムを食べる。</p> <p>9:00 朝の視力測定 Y君 右:0.4 左:0.6 Oさん 右:0.3 左:0.4</p> <p>18:00 夕方の視力測定 Y君 右:0.4 左:0.7 Oさん 右:0.5 左:0.6</p> <p>3日目 8:30 実験最後のブルーベリージャムを食べる。</p>	<p>1日目 13:30 まずは視力測定 Y君 右:0.3 左:0.3 Oさん 右:0.2 左:0.4</p> <p>14:00 ブルーベリージャム大さじ2杯をクラッカーにつけて食べる。</p> <p>16:00 ブルーベリー摂取後2時間後に視力測定 Y君 右:0.3 左:0.4 Oさん 右:0.4 左:0.6</p>
--	--	--

【実験を終えて・・・】
目に見えて目が良くなった。

結果を見れば一目瞭然。ブルーベリーは本当に目に良いことがわかりました。朝ブルーベリーを摂取し、夕方目が疲れている時間帯の視力検査でも、ちゃんと効果が出ています。あまりの好成績に、実験者も測定者も驚きの3日間でした。
ブルーベリージャム大さじ2杯は、毎朝食パンにジャムを多めに塗ればそれで大丈夫ということで、パン食の人は続けやすいのではないのでしょうか。
ブルーベリーの効果を一番感じるときは、ブルーベリーの摂取を止めた時かもしれません。また老眼にはさらによく効くともいわれています。「最近視力が落ちてきた」と思っている方は、一度試してみてください。もちろん効果には個人差がありますが・・・

【参考文献】
ブルーベリー全書／日本ブルーベリー協会編
(本文より一部抜粋)
目を良くするために必要なブルーベリーの1日あたりの摂取量は、(中略)生の果実なら1日に40g以上(20〜30粒)〜80gとなる。(中略)一方ブルーベリージャムでは、30〜40gをとる必要がある。
ブルーベリー摂取の効果は、人間の場合、4時間後に現れ、24時間でその効果が消失する。かなりの速効性が期待できる。

ブルーベリーは

ブルーベリー誕生の歴史

ブルーベリーは、北アメリカの先住民族によって利用されていた。アメリカ人の遠い祖先であるヨーロッパからの移住者が飢えと病気から身を守ることでできたのは、先住民族から分けてもらった野性ブルーベリーであったといわれている。そしてブルーベリーは「命の恩人」といわれるようになったのである。
20世紀初頭、アメリカは国家的事業として野生ブルーベリーを品種改良し、栽培ブルーベリーの生産に取り組んだ。1920年、品種改良に着手してから12年目に、3品種のハイブッシュ系ブルーベリーが誕生し、その30年後にラビットアイの栽培品種が誕生した。

ブルーベリーの産地として

ブルーベリーが日本に導入されたのは、今から55年前。経済栽培はまだ40年に満たない。
柳田とブルーベリーが出会ってからは、23年という歳月が流れた。失敗を繰り返しながらも、チップ栽培や販売経路の確保など、独自の取り組みにより少しずつ成長してきた。
今後、能登町の特産品としてブルーベリーが飛躍を遂げるためには、まだまだ課題がたくさんあるのではないだろうか。「能登町のブルーベリーはおいしくて高品質」であるために、ブルーベリーに関わるすべての人が協力し、努力して、さらなる産地化を進めてほしい。
生で食べても加工してもおいしく食べることができ、そして健康にも良いブルーベリーには、ほかの果樹にはない不思議な魅力が感じられる。
きつと「青い宝石」は輝きを増し、「ブルーベリーの産地・能登町」として全国に誇れるようになるだろう。